

地域の歴史文化を発掘で復元

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木 達夫, Sasaki Tatsuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002000591

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



地域の歴史文化を発掘で復元

佐々木 達夫

(金沢大学名誉教授)

金沢大学考古学大会(2022年11月5日)で発表した際に配布した資料を報告する。筆者の研究の一つに、遺跡出土の陶磁器(考古学陶磁器)から人々の生活を復元するというテーマがある。それを述べる。

地球は回転し、空気は引っ張られて風が吹き、地形の凹凸は空気の流れや温度を変え、乾燥地や多雨地ができ、気候帯や地質の違いは風土を生み、地域に棲息する動植物や鉱物の違いが生まれた。人間がそれを利用すると、地域の特産物となった。風土が違い特産物の違う地域の人々は他地域の産物を求め、移動や征服、交易をし、物資や技術が移動し拡散した。文化交流である。他文化の刺激や影響は新たな地域文化を生み出した。都市や国家など社会組織の影響は、時代ごとに人々の生活を変えた。時代や環境の移り変わりは人々の生活に影響し、独自の地域文化が育まれた。

その様相を探る考古学研究(歴史研究)は文化交流史という研究分野となり、人間が生きた時代と地域全体が研究対象となる。そのため、研究課題や研究方法は多様で無限である。概説書などに記される研究課題や成果はその一部に過ぎない。研究目的や対象に即して新たな研究方法が生まれ、従来の研究対象と方法は進化し緻密になり、研究分野が細密化している。

筆者も考古学学生になる前から飛鳥奈良や博物館、各地の遺跡を訪れたが、アジア東西文化交渉史に興味を惹かれた。北海道佐呂間湖畔で進学後最初の考古学実習に参加する際に、ガソリンなど無いシルクロードを踏査する練習として、東京から TENT を積んで自転車でいった。東洋史学生ときは仏像の起源を研究したが、起源を示す資料はないと思われた。美術に関心があり、大陸から伝わった日本の古墳時代の壁画研究にテーマが移り、大学紛争後の卒論は壁画が描かれた古墳及びその時代を扱った。後期群集墳や横穴墓の発掘調査などに参加し、併せて墓を営んだ人々が生活した集落研究に関心は発展した。修論は村落(住居跡)変遷研究となり、『原始古代社会研究1』校倉書房に

掲載された。

これは地域文化史あるいは人々の活動した生活空間、領域史の研究であった。人々の居住した町や村の建物跡を中心に、村落と周辺環境を含めた地域(領域)全体のなかで、人々の生活の変遷を探った。地理的にも政治的・経済的・文化的にも繋がりが強い地域全体を一つの研究対象とした。

生活を支えた生産研究として窯跡を発掘し、都市や町村跡で普遍的に見られ出土数が多い陶磁器を資料の中心に置いた。現在も継続中の出土陶磁器から生活を復元する研究は、各地域文化史の復元とそれらの比較研究である。地域文化の内的変化と外からの影響を比較し、様々な交流の様相を物から探る。当時の人々は知らなかった遠隔地物資の文化的影響を、物の比較から探り当てたときは嬉しくなり、遺跡に漂う彼らの気配に語りかけたくなる。

領域全体の様々な課題と資料を同時に検討するが、場所や面積が限られた発掘の成果から全体像を見通すことは難しい。一つの地域でも古代、中世、近世など時代が変わると文化様相も変わる。北日本の中世城館や江戸時代の町跡や窯跡発掘にも時間を割いた。中国の先史時代から清代までの陶磁器研究も始め、仰韶時代や唐代の研究を進めた。博士論文はその一部の元明時代窯業史となり、吉川弘文館から出版した。

地域文化の変遷と各地の地域文化の交流に関して、日本海文化交流史研究から東南アジア、中央アジア、西アジアへと研究範囲を広げた。アラビア半島は欧米人による先史時代遺跡が発掘されていたが、考古学では最後の未知の世界と言われた。ビザは発給されず、日本やアジア人の発掘調査も無かった。日本には遺跡資料としてのイスラーム陶器が無かったため、研究テーマに合うイスラーム時代遺跡を自分で発掘し、研究資料を手に入れようと思った。現在もアラビア半島の地域文化を、遺跡から出土した陶磁器を町村跡や周辺環境のなかに位置付け、地域生活の復元を続けている。

発掘地とその周辺の政治的、自然的環境、狩猟漁労、家畜飼育、農業や貿易などから地域文化圏を設定し、その比較をしている。数千年前から海上交流の盛んな地域であったことが知られていたが、中近世ではヨーロッパ、イラン、インド、東南アジア、中国との交流を語る陶磁器が出土している。生活を語る出土品組合わせは、日本や中国、アフリカ、アメリカとは違っていた。すでにグローバル化した時代でも生活文化は地域文化圏が色濃く反映していることを発掘が伝える。

発掘すると泥レンガの大きさ、レンガを作った人の指紋、家壁の構築法や幅、使った石の大きさなど、細かなことが分かる。だが、それをもとに地域文化の特徴を記述するのは、地域全域を語る証拠が少な過ぎて難しい。発掘した細かな事実を基盤として、人々が生活した住居を周辺地域のなかに位置付けて領域全体（文化圏）の特徴を記述するが、これは泥臭い方法であり時間がかかる。そのような方法を採用した筆者は今でも発掘を続け、個々の事実解明に時間を費やすことになった。小さな発掘現場から、生態系や政治権力が同じ領域全体の歴史の変遷を復元記述すると、推測の部分も多くなる。少年老い易く学成り難しである。

まだ発掘しているのか、高齢者だから体のことを考えなさいと言われる。事実の発見とデータ記述を研究の基本としたため、終わりが見えない作業が続いているが、体力的には終わりはもう来ている。

次にそのような理由から現在発掘中のアラブ首長国連邦ディバの砦を紹介した。2020年2月に始めて、コロナの流行った期間を通して継続中である。写真や図面は『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』の2023年1月刊行号に掲載している。

趣味の考古学を研究して年月が過ぎ、喜寿を迎えた。これまでに書きたいいくつかの随筆・短文を以下に紹介して、研究の目的や方向性を述べることにする。

学生時代の思い出（弥生 36号、2013年4月）

定年退職して2年が過ぎた。楽しいことも辛いこともあった仕事から解放され、趣味の研究対象地だったアラビア半島にいる。そんな時、学生時代の思い出と連絡があった。学生時代、それは最近思い出すことも無く、言葉を失うような過去となっていた。

東大考古学に進学したのは昭和43年。駒場で留年

していたから、今村さん堀さんと考古学で同学年となった。考古学研究室に入る前、東洋史研究室に少しいたが、重厚だが時間が止まり空気の重い室内で漢文を読むより、明るい太陽の下での野外調査にあこがれ、斎藤先生に転コースをお願いした。6月末の教授会で承認され、書類上は4月に遡って7月に考古学の学生となった。

東洋史のときはインド古代史や仏像の起源を調べ、朝鮮にも興味をもった。考古学に移り、古墳の勉強を始めた。斎藤先生ご著書を校正のように読み、誤字や脱字、考え方に対する疑問を各ページに書き込んだ。関野先生の楽浪郡金貨の論文は読者批判を先取りした巧みな構成で、論文作成法を学んだ。曾野先生は西アジアや南米の体験も話されたが、ご病気で歿した。佐藤先生の縄文施紋技法の実習は2コマ連続4時間続いた。大林先生、日本史の井上先生、東洋史の山本先生の授業も出た。研究室で対面ゼミ形式が多かった。

みな個性豊かな先生方だった。佐藤先生のお宅に泊まり、朝一緒に学内を歩いていると、教授会だから不精髭を剃るよう西洋史の堀米先生が佐藤先生に注意した。私はブレザーにネクタイ姿だったが、発掘するようになると日雇い労働者スタイルとなった。

考古学に籍を移した1週間後の7月初め、文学部学生自治会の大会で無期限ストライキが決まり、授業はなく大学が閉鎖され、とても暗く非常に辛い日々が続いた。国会デモや角材ヘルメットに慣れ、冷たい机上で寝たせいか右肩を痛めた。迷いの中で就職も考えたが、最終的に大学院に進んだ。5月卒業の6月進学だった。卒業証書は1年後に郵送されてきたが、アルバムなどは無い。

大学院で今村、堀、赤山さんが同期、安西、渡辺、宇田川、日野、甲元、飯島、岡崎、前田さんと研究室で会うことが多かった。一つの授業に分担したかのように数人が参加し、大学の先生は会議や葬儀など多忙で、年間を通し10回も授業は無かった。一人の学生は1年に1回発表するだけだった。後輩となる考古学学生は優秀な人が多く、今も学問の第一線で活躍され、会うと嬉しい気持ちになる。

研究テーマの関連授業があった東京教育大学、東京都立大学、東洋大学、青山学院大学などで、ゼミ

や研究会に参加した。卒業論文で当時珍しかった卓上電卓とパンチカードを使い、修士論文で学生用コンピュータが東大に1台あったので、データ解析をした。日本に1台の学生用で、考古学では日本初のコンピュータ利用者となった。重いカードを抱え順番待ちで長時間並び、教室全部を占める大きなコンピュータから細長い巻紙に01の数字が打ち出された。ソフトは自分で作るため医学部助手の数学授業に参加したが難しく、見かねた理系の友達がソフトを作ってくれた。

最初の発掘は常呂遺跡で、上野先生、藤本先生、菊池先生が助手だった。自転車に自作テントを積み、常呂まで行った。シルクロード研究を目指したので、ガソリンスタンドがない地を走破する練習だった。研究室の発掘は素晴らしいと思う。発掘技術や考古学そのものを学び、共同生活も楽しかった。夜の酒で豹変する先生もいた。

大学院進学後は、遺跡や博物館の見学、発掘の日々を送った。常呂の発掘や分布調査以外で、大学院時代の発掘や測量調査は、稲荷前古墳群発掘と測量（横浜）、花輪台貝塚・大申貝塚・中妻貝塚・北方貝塚の測量（茨城県）、清水場遺跡発掘（横浜）、外原遺跡発掘（船橋）、秋葉山古墳群測量（座間）、谷原遺跡発掘（相模原）、ひさご塚古墳測量（座間）、夢見崎古墳群測量（川崎）、川崎市横穴墓分布調査（川崎）、山辺田窯跡発掘（有田）、河越館跡発掘（川越）、若杉窯跡発掘（小松）、広垣外遺跡発掘（宮田）、惣作窯跡発掘（田原）、青戸城跡発掘（東京）、妙土窯跡発掘（笠原）、九谷窯跡発掘（山中）、日枝神社境内遺跡発掘（東京）、天神森窯跡発掘（有田）、丸尾窯跡発掘（有田）、上杉定政館跡発掘（伊勢原）、一ツ橋遺跡発掘（東京）、動坂遺跡発掘（東京）、十三湊・ダンリン寺跡発掘（市浦）、石上神社遺跡発掘（木造）、柿右衛門窯跡発掘（有田）、谷窯跡発掘（有田）など。

旅館や民宿、寺、個人宅でお世話になり、とても思い出深い。申し込んだ中国語や韓国語の教室はいつも欠席した。外国留学の経験はないが、日本に留学したようなものだった。

多摩川段丘下の横穴墓出土人骨を自宅に運び、警察で殺人と間違えられたが立派な木製お棺をもらい、大学病院に運んだ。早稲田の桜井先生の世田谷区遺跡調査もたびたび参加した。八王子市の大規模

集落の発掘は、旅館で明大生と徹夜マージャンしか思い出せない。昭和40年代は列島改造で緊急発掘が盛んになり、大学院生が発掘現場の主体者だった。論文執筆は移動中の自動車も利用し、満席で立ったまま原稿用紙に震える文字を書いた。発掘中の有田駅前旅館で夜書いた論文もある。学生時代は1日に朝昼夜3つあり、1日は3日だった。今は1週間が1日で、何もしないのにすぐ過ぎる。

文化財保存運動にも参加し、文全協設立の行進で甘粕先生を車に乗せ先導した。駅前で遺跡保護のガリ版ビラを配り、古墳などの遺跡見学資料を作り、見学バスを手配した。

1ドル360円で円持出制限があり、沖縄もパスポートが必要でドル使用だった。修士に入った夏、日野さんと韓国を旅した。初めての新幹線で博多の日野さん実家に泊まり、船で発った。金元龍先生にソウル大考古学生を紹介いただき、一緒に遺跡を巡った。ソウルに戻ると彼らは留置場で尋問された。日本人学生と一緒に地方の辺鄙な場所に行ったので公安警察の取締まりだった。国立博物館や大学博物館、江華島支石墓、宋山里・梁山里古墳群、金海貝塚、風納里土城などを訪ねた。翌年は一人で台湾大学博物館や省立博物館、中央研究院、故旧博物院、紅頭島、八千洞旧石器遺跡などに行った。

駒場で東洋史授業を受け、窯跡の発掘や文化交流史の指導を受けた三上先生とインド・アフガニスタン・パキスタンを旅行した。後の中央・西アジア研究の基礎となった。東南アジアも興味があり香港やタイに行ったが、就職前最後の外国調査は、東文研の深井先生のイラン・イラク調査だった。テヘランでは体温より高い室温で眠れず、木陰の昼寝が心地よかった。秋からイラクのテルサラサートで発掘。遺跡内の電気もない埃まみれのテント生活で、田辺さん千代延さんが隣人だった。夕日の丘上で渡り鳥は自由に飛んで良いかと眺めていた。バグダッドで出土品整理を続け、堀さんと同じホテルの部屋で過ごし、イラク考古学博物館で鳥形遺物すべてを撮影したが論文は完成しなかった。

書いているうちにだんだん学生時代を思い出してきたが、紙数が尽きた。就職は奈文研や開設準備中の歴史博も迷ったが、九谷焼の金沢にした。赴任を延期し迷惑をかけ、上野先生から年度内には来るよ

う言われ、3月に行った。とても長い修行時代が終わった。

ゴミを拾うと歴史がわかる (『人文学序説』金沢大学人間社会学域人文学類, 2008,27-31)

考古学はゴミ拾いの学問

あなたも遺跡の発掘をテレビで見たでしょう。泥の地面に這い蹲るようにして一日中、下を向いている。地味にも見えるし、趣味で遊んでいるようにも見える。それも昔の人が捨てた土器片や食べ物の屑を拾って喜んでいる。そうとうの変わり者か、あるいは偏屈者か。大学まで進学したのに、あんな人たちと一緒に、まともな職に就けるだろうか。

違うよ、と言いたい気もするが、やはり私もゴミとの付き合いで長年を過ごしたと白状せざるを得ない。明治時代に日本の考古学が誕生したときは、古物学や骨董学になる可能性もあったという。考古学というロマンティックな名前を付けた先学に少しほっとしている。

その考古学がゴミ拾いであることは間違いないが、少し威張って言うと、人類の歴史を遺跡や遺物から明らかにする学問である。このような定義を学生時代に考古学概論で聞いた。今も基本的にはこれで良い。しかし、日本の考古学も明治時代初期から今に至るまで百数十年間、多くの研究分野を開拓し成果を挙げ、研究方法は世界中で論争しながら変化している。だから、定義をわかりやすく簡単にするほど、その内容は洗練されると同時にほとんど意味のないものとなる。どの学問も一行で言えるほど簡単ではなく、しだいに複雑多岐化するのが当然で、それは考古学も同じである。

考古学は過去の人々が残した痕跡から、人々の行為やそうさせた理由を推測する。彼らの住んだ家の跡や行動の痕跡は地面に残され、小さな生活用具や道具などは他の場所にも移されて伝わる。それらを遺跡や遺物という。遺跡は地面の下に埋もれているばかりでなく、地上に現れたまま残ることもある。遺物も腐って壊れたものがほとんどだが、今も使われるもの、美術品として美術館に展示されるものもある。いずれも考古学で歴史を考える過去の人々の痕跡の一部であり、ゴミとはいえ立派で由緒正しい研究資料である。同じ資料を美術的に扱えば、美術

品と呼ぶだけのことである。歴史研究で重要な文字史料すなわち古文書も、考古学では紙という材料と文字という物として扱われる。ゴミであることに変わりはない。

ゴミを拾うにも作法がある

歴史学上の課題、すなわち考古学の研究テーマ、つまりは人々の生き様を表現することは、砂浜の砂の数のように数限りなくある。そうしたテーマを研究するために遺跡を掘り、ゴミとして埋もれている遺物を丁寧に集める。そうした発掘と呼ばれる研究には、それぞれの国で発展した独自の方法がある。日本にもほぼ確立した細かさという特色をもつ研究の仕方がある。

それは、どの場所から何と一緒に組合せで出土したかを詳細に観察し記録し、それをもとに歴史を考えるというゴミ拾い学の作法である。どの遺跡のどの層位から何と一緒に出土したかという物と物の関連性が不明な資料は、それがいかに宝石や貴金属で高価格としても、歴史資料としての価値は低いものとなる。世界で唯一の物は、珍しいという価値は高いが、考古学で比較検討する資料としての価値は低い。それは他に比較する歴史資料が無いため、歴史的な価値を引き出せないからである。物を掘り出し記録を隠して販売するのは盗掘者と呼ばれる骨董屋や、趣味が高じて物を集めたり投資対象としたりする人で、考古学という学問からは困った人である。考古学は優雅で気高い作法でゴミを拾うのである。

遺跡の発掘は、それ自体が楽しいことで、学生や作業員は発掘参加が目的となる場合もある。人生を優雅に生きるのに、こんなに知的で楽しい遊びがあったのかと思う。それも立派なことをしていると尊敬されることさえ珍しいことではない。とはいえ、掘ることだけが目的では、研究者としてのレベルが低いと言われても反論できない。発掘中とその後に、図面や写真及び観察した途中経過と結果を文字で記録し、遺構はその場に壊れないように処置して残し、保存修復し復元して、地域の文化財として活用する。地域を学ぶ学校の授業で見学に行き、観光客が歴史風土を楽しみ、年配者の生涯学習に利用し、地域文化環境の向上に貢献する。

遺物もどの場所から出土したか図や写真で記録し、泥を落とすため水洗いし、どこから出土したかを忘

れないように注記し、元の形がわかるように復元し、1点ずつ記録を残すため登録台帳に記載し、形態の特徴や材質・用途を記し、材質や用途を考えながら分類し、周辺文化と比較して型式を明らかにする等の研究を進め、実測図を作り写真を撮影し、その歴史の意味を探り、保存修理して博物館に展示し、歴史資料として解説する。じつは、ここまでは発掘に含まれる一連の作業である。発掘はその場限りの、しかも1点主義の宝探しではないし、毎晩現場で酒を飲むことでもない。たとえ、それが楽しみで参加する学生が多いとしても、宝が現れたときのこぼれ落ちる笑みを隠さねえとしても。

ゴミにだってゴミなりの価値がある

遺跡も遺物も、その発掘の状況や観察の記録をデジタルデータで保存し、インターネットで無料常時公開し、誰でもいつでも使える人類共通の文化遺産データとする。発掘成果に著作権はなく、出版社と一緒に遺物写真で金儲けなど許されない。考古学資料はすべての人の共有物である。ゴミだってそのへんに捨てておくのはもったいない。

ユネスコが登録する遺跡は世界遺産として優遇されている。当然のことだが、世界遺産に登録された遺跡だけが人類の遺産・文化遺産・文化財ではない。どこにでもある地域の歴史を語る遺跡や遺物が、考古学研究では人類遺産として重要である。我々だって一人一人がそれぞれ違い、その個性を大事にするというのが考古学という学問である。だからゴミ拾いの考古学には、じつはゴミが存在しないのだ。

それでも最近では、新聞に載りテレビで紹介される華々しい遺跡だけを重要なものだと思う人もいる。世界遺産に登録する目的は、歴史文化自然を壊さずに未来に継承することなのだが、地域活性化のための観光客誘致や政治優先で文化財を利用する弊害も出始めている。発掘を始めた、あるいは発掘中に生まれた研究目的を達成して、歴史を豊かに正確に表現する研究ができた遺跡のみが学問上で重要となる。芸能文化報道や政治的判断と、学問達成の間にはかなりの違いがあるのだ。テレビや新聞は学問を判断する指標ではないことに注意しよう。研究成果を挙げることを止め、遺跡を利用してテレビに出て金儲けするのは人類史研究の目的から外れている。

考古学の発掘成果は新聞を飾る。とくに国内政治

で問題があるときは、発掘成果が新聞第一面を飾り、考古学は政治や社会問題の隠蔽に利用される。新聞の取り上げ基準も三つある。最古、最大、金である。世界最古、地域で最古、ある時代で最も古い。古いことがわかるのは良いが、考古学は古ければ良いというような判断をしない。歴史資料なので、古いものも最近のものも、研究する資料的価値で判断する。最大も同じことで、大きいことは素晴らしいと評価することが一般的である。地域最大の前方後円墳は新聞記事になっても、地域最小の古墳は話題にもならない。考古学資料として大きい、中くらい、小さい、これらのいずれも重要な研究資料であり、いずれを欠いても歴史研究に差し障りがある。金は権力とつながる。黄金の仮面発見は記事になるが、泥の土器はどこにもあり、権力と関係しない限り話題にもならない。未来の考古学者は国会議事堂の発掘に血眼になるかもしれない。日本の国家権力が集中した場所で、もしもそこに隠された金が発見されたら、世界的発見としてピラミッドも霞むだろう。遺跡の価値について、新聞報道の基準となる珍しさと、考古学研究の歴史を知る資料としての基準はかなりずれている。

ゴミから作る歴史は頭のなかの再現

考古学で扱うのは形あるものが基本となる。具体的に目に見えない社会や生活を、形ある物の残片から理論を通して考えている。歴史において理論とは、実際に起きた人々の行動や残した物から作られたもので、今までの研究成果ともいえる。実際には理論が役に立たないことも多く、それはこれまでの経験や研究成果と合わない歴史的事実の発見がたびたび起こるからだ。遺跡から得られた一つ一つの事実について、やはり自分で考えることが大事だと思う。

物の形を比べる研究をしていると、形のない見えないものに興味を引かれる。本当に見えないかと言われると見えるような気がする。お化けや幽霊は見えるから信じられる。霊魂や神仏も見えるときがある。遺跡から出土する物と同じで、理論、お化け、神、こうしたものはじつは形があり見えるような気がする。具体的な体をもつ人とその霊は不可分かもしれない。お化けの延長線上にある神仏も具体的な形のあるもの、絵画や像として目に見えるものになる。じつは、私はお化けも神も信じていないが、昔の人

は皆、信じていたと思う。

仏像を拝むのは人が作った見えない仏を石や木、土の塊に見るからだ。形あるものは変化し変身し、その意味は変わりやがて消滅する。霊やお化けや神も人が作り、時代や地域によってその姿は変身し、いずれ消える。考古学研究では形のあるものと形がないと言われるもの、ともに過去の人には見えていたと考えるのが適切だろう。だから昔は儀式が多く、論理的に解釈できないことが多いのだ。

遺跡を発掘し、今まで知られなかった歴史的事実を発見する。それは私の生きる世界と異なる歴史的な世界である。それを観察して記録に留め、解釈して論文を書く。過去の人が感覚的に知っていた世界と違う別世界の構築である。その事実は現実であろうか、あるいは夢の世界なのか。自分の世界の外にあった過去の世界が、自分の内の世界と同一化する。過去の世界に生きると、夢は現実となり区別が消える。発掘は空間ばかりでなく時間の世界も移動させる。その世界は頭のなかの夢のような現実となり、他の人と共有するのは難しい。社会的に共有しない体験は現実世界と言にくい、考古学者が生きる現実の世界である。ゴミから作られた発掘で再現する世界は、個人の頭のなかの夢という現実である。

考古学は事実に基づく学問と言われるが、それにしては年代や解釈がたびたび変わる。テレビや新聞では新発見が続出している。そこにこそ歴史のロマンと未知への魅力が感じられるのかもしれない。

君たちもゴミの研究者

学生はまだ研究者とは言えない。研究者としての教員が実践する研究を側で見聞きしながら、一般書や発掘の報告書を読む入門者である。研究史上の問題点を調べ、先学が研究した成果を見直し、問題点を整理し検討してレポートを書く。多くの人が本や雑誌で取り上げることや話題のテーマを学生は卒論テーマに選ぶ。少し勉強すると、その背景に数千の論文があり、読むのも大変だし、新たな成果を得られないと気付き、壁に当たったと言ってテーマを変える。学生はまだ自らのテーマで発掘できないから、地域と時代を限って特定の物を選び、報告書から抜き出し一覧表を作り、解釈を加えて卒論にする。それでも一つのことをまとめる訓練は、学生の能力をかなり高め、自信に満ちあふれさせる。

研究者でも論文を書かないと、学問能力が急激に退化する。大学で事務作業に専念し、カルチャーセンターで面白おかしく話をし、博物館の展覧会カタログをわかりやすく書くと、論文執筆能力が落ちる。他人の研究成果をまとめ利用していると、入門時の学生と同じようになる。論文はいろんなことを調べ、註を付け、念入りに論理を展開させ、身を削る思いをするものだ。君たち学生も、身近にある一つの物をじっくりとさまざまな角度から観察し、記録し、比較し、検討してみよう。それが考古学への、あるいは考古学研究者への、未知の世界の入り口を開くことになるのだ。

私の研究（『人文学序説』金沢大学人間社会学域人文学類, 2008）

砂に埋もれた生活跡から文化の交流を探る。

昔あるところに人々がいた。今はその人々を誰も記憶していない。その土地に昔、人々が住んだ伝承があっても、どのような人々か忘れられている。しかも伝承は間違いが多い。

彼らの生活はどのようなものだったか。彼らが住んだ住居や環境、生活で使った生活容器や道具はどのようなものか。彼らの生活をわずかに偶然残った物で復元すると、おぼろげながらある時代ある地域に共通した生活様式が見える。それを今、私たちは文化と呼ぶが、その文化はいつの時代のどこの地域と類似しているか。他の文化とどのような関わりをもっていたか。他の文化と類似する点と異なる点を比較して、その系統や属する文明圏を考える。こうして地球上で生き死んだ人々の、今は忘れ去られた過去の記憶が少しずつ蘇る。

私は荒れ地となった土地、つまり遺跡を掘って、記憶から消えた人々の生活や歴史を復元する資料を手に入れる。私の研究は歴史学のうちの考古学という学問分野の研究方法で人々の生活史を復元する。生活史のなかでも、どの地域でも誰でも毎日の生活で使った用具、つまり食べ物を保存し調理し盛って飲食に使う陶磁器を主な研究資料とする。

その理由は、遺跡の発掘でいろいろな物が出土するが、大部分が陶磁器だからだ。生活のなかで陶磁器は重要ではない。夜逃げするとき、貴金属や思い出の品をポケットに入れても日常で使う茶碗は置い

ていく。だが、生活で用いた大部分のものが腐り今に残らないため、陶磁器は遺跡を掘って過去を復元するための基本的な資料になる。

学生時代から今まで同じような研究をしている。学生時代にインドから中国への仏教文化の伝播と変遷、その日本への影響を調べたのが最初だった。その後、多くの地域の文化要素に興味をもち、日本や中国、朝鮮の東アジアの古代中世の遺跡とその出土品、及びイラク、エジプト、ペルシア湾岸の遺跡と出土品、この二つの地域研究を行った。とくに東西文化を比較研究する資料として遺跡出土の陶磁器を用いるため、その中間にあたるカンボジア、タイ、ミャンマーの東南アジア地域と、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタンの中央アジア地域の陶磁器を研究している。

学生時代に志した東西文化の交流史研究、それをどの遺跡からも大量に出土する陶磁器を用いて明らかにする研究である。あちこちで研究テーマに合う遺跡を探して発掘するが、最近の主要な発掘遺跡はペルシア湾・オマーン湾の海岸に砂で埋もれた港町跡である。そこには東西貿易で海上を運ばれたイランや中央アジア、東南アジア、中国の陶磁器が残されている。貿易で伝わる文化要素、遠くの国々の生産品を使う人々の食卓。今は忘れ去られた過去の人々の生活の様相が蘇る。

どんなに学問が進んでも、過去の人々の生活のすべてを知ることはできない。今の人々の生活をすべて知ることもできないのと同じで、すべてを知る必要はない。しかし、過去の人々が当時知らなかった東西文化交流の状態を、歴史的事実として私は復元できる。研究は趣味であり時間と費用の浪費である。毎日の生活にすぐに役立たないが、文化や教養の高さ、国の文化程度を示すのが学問である。私の研究も世界の人間文化を豊かにする役割を果たしている。

海上の道（聖教新聞 2000 年 1 月 『陶磁器海をゆく』 紹介文）

アラビア半島の砂漠を掘ると、海のシルクロードが見えてくる。十数年間、私たちはペルシア湾に沿うアラブ首長国連邦で考古学調査を続けている。古代中世の遺跡を発掘し、海を利用した東西貿易史を

調べるためである。

アラビア半島というと、砂漠とラクダ、イスラム教を思い浮かべるだろうか。日本とは別の世界というイメージが強い。だが、発掘調査で毎年冬、この地を訪れると、義理人情の厚い日本的な国だと思うようになった。

私たちが遺跡を発掘する目的は、東西世界の両文明が古代以来、いかに海を通して結ばれていたか、具体的な物を通して探ることにある。

ペルシア湾は今、石油を日本に運ぶ海のルートの拠点として、私たちにとっても馴染み深い。このことは二十世紀後半の歴史的な特徴と知っている人が多い。だが、考古学調査から見ると、こうした東西世界の歴史的あるいは文化的な交流は、一般に考えているよりも、かなり前から活発だったことが明らかになってきた。

じっさい、アラビア半島でジュルファル遺跡やハレイラ遺跡を私たちが掘ると、世界各地から運ばれた陶磁器のかけらが数多く出土する。腐らない物が遺跡に残るのは当然だが、今は残ることがない腐った物が多いことも想像できる。陶磁器と一緒に多くの生活用品が運搬されたに違いない。

こうした発掘から、海を通じた交流の実態が判明してきた。古代からペルシア湾はイラクやイランの物資を中国や東南アジアに運び出す拠点だった。同時に、中国などから物資を運び入れる導入地点でもあった。

熱砂に埋もれた古代中世のアラビア半島の港湾遺跡を掘ると、中国や東南アジアの陶磁器が出土する。私たちはそれを求めて冬に発掘に行く。日本ではまだ知られざる土地、アラビア半島を旅し、陶磁器のかけらを拾い集めるのは楽しい。

遺跡に散らばる陶磁器のかけらが語る言葉に耳を傾けると、さまざまな歴史が聞こえてくる。異国から運ばれた物は、そのわずかな破片が残るだけでも、扱い方しだいで文化の交流を具体的に物語りはじめられる。過去のできごとを想像する考古学の、ロマンと実証性が十分に発揮されるのを実感するときである。

私は海辺の港町の廃墟で、捨てられて割れたやきもののかけらを拾って数十年を過ごした。遠くを孤独に旅することが多かった。いつも下を向いて何か

を拾い続けていたような気がする。

拾い集めたものは、歴史の真実を伝える貴重なかけらだ。手に取ることができる星屑なんて、宇宙の全体からみれば物の数にならないほど少ない。廃墟に落ちていたゴミの中からわずか数片を手にしたようなものだが、広大な海を通して文明が交流した痕跡を得ることができた。

歴史のフィルターを通して今に伝わるかけらは、美しいものだ。少し汚れたものもあるが、かえって愛おしく感じる。海の道ははるか遠くまで続く。

考古学陶磁器 Archaeological Ceramics (考古学ジャーナル 2008,5 今月の言葉)

遺跡にはさまざまなゴミが残る。多くは土器や施釉陶器などの陶磁器である。それを考古学陶磁器と呼び、美術陶磁器や骨董陶磁器から区別する。私が学生のころ、すでに考古学陶磁器の研究は進んでいた。鎌倉の中国青磁の採集は有名だったし、遺跡の発掘でも現代陶磁器を除いて捨てなかった。窯跡や城館の発掘は中近世考古学の基本であった。それから40年ほど私も考古学陶磁器に関わった。生産や流通、生活での使用が研究の主要テーマで、そこから波及した研究が今も盛んに行われている。

考古学陶磁器は歴史の情報を身にまとった研究資料で、発見される場所は窯跡や遺跡が主となる。窯跡陶磁器は生産の実態研究、つまり技術や生産体制、製品を系統や分布、地域史のなかで扱う。都市遺跡陶磁器は流通や生活、使用階層、地域差などの研究資料となる。研究方法は多岐にわたり精密化し、質的量的、美的、組み合わせを基に使用様式が検討され、化学分析の利用も増え、解釈の面でも方法論が整備された。歴史、技術史、美術史、貿易史、生活文化史の資料として欠かせない資料となった。最近の学術的深化は著しい。

考古学で当然のことが、陶磁学会でも認められてきた。美術館や個人蔵の美術陶磁器を扱うだけでなく、遺跡出土の破片も、史料も、科学技術も利用し、鑑賞面も取り入れた総合的な学問分野となりつつある。考古学陶磁器は学術的目的や方法が常に変化しているが、もの自体は以前とそれほど変わらない。考古学陶磁器はどのように発掘され記録されたかで歴史的付加価値が決まる。遺跡の立地や種類、規模、

層位、同時に出土した陶磁器の組み合わせ、共伴遺物、遺構の関連などが付加された価値である。窯跡の発掘現場で「地べたを這いずりまわっても研究できない」とか、考古学を補助学と言う人はもういない。考古学的陶磁器は歴史課題を解決できると過大な誤解と期待さえもたれる。

それでも美術館の展示品に割れた陶磁器は無く、歴史博物館には遺跡発見の破片が並ぶ。美術価値の高い種類は研究論文が多く、豪華本も刊行され、その一方で生活雑器を研究する人は少ない。陶磁器の研究は立場や職の違いで方法や目的、成果が違う。博物館、埋文センター、教育委員会、大学などで、それぞれ研究に関わる体制と時間、目的と方法が変わる。博物館蔵品利用は短時間に成果が挙がるが、遺跡から切り離されたものは歴史性が薄まる。採集は短時間にでき限られた数量だから整理報告しやすいが、層位や遺構との関連は弱い。発掘品は遺跡を発掘し出土品を整理分類し実測撮影し、報告書刊行が必要だから、時間と労力がある。それでも考古学陶磁器は発掘者が利用すると成果があがる。

成果発表は英語だと世界的に利用され、日本語では読者が日本人にほぼ限られる。学会、雑誌、単行本で対象層が変わり、インターネット雑誌は無料公開と利便性に優れる。研究後の保存と多面的な活用は博物館展示やインターネット公開が有用で、資料は地域の学校教育や観光でも利用される。外国では破片が遺跡で選別記録され捨てられる場合も多い。報告書や論文が書かれた後の収蔵庫内に眠る考古学陶磁器の利用法開発に興味が引かれる。

近世近代の考古学研究 (考古学ジャーナル 715号, 2018年8月, 今月の言葉)

日本では近世考古学と呼ぶ、江戸時代の発掘が盛んである。揺籃期の近世考古学を認識する画期の一つが半世紀前の中川成夫・加藤晋平「近世考古学の提唱」である。それ以前から江戸時代の遺跡は発掘され、陶磁器を焼いた窯跡発掘もその例である。江戸時代後期は各地に陶磁器産地が拡散し、明治時代に衰退したところも多い。陶磁器の生産と流通を見ると、江戸時代後期と明治時代は継続しながら急激に変化している。19世紀あるいはその後半は連続して変遷し、一体的な研究が考古学調査に適している。

今が現代、その前は近代である。明治 100 年を迎えた私の学生時代は、明治時代以降を近代、江戸時代を近世と呼んだ。それから 50 年、近代は 20 世紀となり、近世は 16 世紀末から 19 世紀とするのも可能である。現代は推移し、近世と呼ぶ時代は変わる。江戸時代後期と明治時代は、19 世紀後半の連続して急激に変化した時代を含み、近代の最終基層文化となる。

日本で考古学が登場した明治時代初期、江戸時代は発掘されなかった。十数年前に終わり、当時の人々が生まれ育った時代である。その後、縄文時代や弥生時代、古墳時代と呼ばれる時代の研究が盛んになる。考古学が研究する時代に制限はないとしながら、発掘調査や研究は石器時代と奈良・平安時代を前後に含み、縄文時代から古墳時代までが主となった。歴史時代考古学の研究者は少なく、近世の歴史考古学分野が近世考古学として指摘されたのが 50 年前である。今は明治時代の発掘調査が増え、これから 20 数年が過ぎれば太平洋戦争の戦跡も 100 年を超え、国際的基準の文化遺産となる。近代や近世の概念は変化し、考古学が研究対象とする時代の呼び方は変わる。

学生時代に私も江戸時代の窯跡や町屋跡、城跡の発掘に参加したが、当時、それが例外とは思わなかった。三上次男の有田や九谷の江戸時代窯跡発掘、加藤晋平の日枝神社境内の幕末明治時代遺跡、加藤や宇田川洋の戦国から江戸時代の葛西城跡の発掘にも参加した。一ツ橋高校地点や動坂遺跡の江戸時代陶磁器を、古泉弘や安孫子昭二と調査した。江戸時代考古学は稀だったが、発掘そのものは例外と言えなかった。

数十年前は日本独自の文化の江戸時代と西洋文化の影響を受けた明治時代を、文献史学や美術史、建築史などが別時代とした。1970～1980 年代は江戸時代から明治時代を連続して扱う研究が現れ始め、それは江戸の考古学発掘が始まり、件数が増えるのと同じ年代であった。考古学の発掘成果は文献史学や建築史学で生かされ、学問分野を超えて具体的な歴史像が描かれた。工事に伴う発掘は江戸時代を対象としても、発掘が始まれば江戸時代と明治時代はともに調査される。2045 年を過ぎると、1945 年がアジア各地の時代区分画期となろう。考古学が主な研

究対象とする時代はいつか、その研究分野をどう評価するか、今後の変化が楽しみである。

金沢大学考古学研究室のこと

金沢大学法文学部・理学部の前身は 1886 年帝国大学令で設置された官立旧制第四高等学校（四高）である。全国を五区に分け、一高（後に東大）、二高（東北大）、三校（京大）、五高（熊北大）の一つであった。1949 年、軍隊が使用していた金沢城址に新制国立金沢大学が設置され、後に国立大学法人金沢大学になる。明治末に北陸帝国大学案が帝国議会で可決されたが、敗戦後の GHQ 下で消滅した。日本海側の基幹大学と言われ一期校に属し、ハイデルベルク大学と金沢大学は城の大学として知られた。繁華街まですぐに歩いて行け、女性職員は昼休みに近江町市場に夕食の買い物に行き、職員・学生に便利な場所であった。

史学科は 1877 年東京帝国大学に設置された学科名称である。金沢大学も史学科を設置し、1974 年に考古学講座と考古学専攻が設置された。史学科は後に歴史文化学コースとなり、伝統的名称の史学科は消えた。

考古学や古物学という名称は明治初めに考案された造語である。考古学という名称が選択されて良かったと思う。古物学や骨董学などだったら、研究分野として衰退したと思う。

金沢大学に考古学が設置された当時、日本には考古学講座がある大学は少なく、日本海側で最初の考古学講座が設置されたのが金沢大学であった。その後には弘前、新潟、富山、島根、山口、鹿児島など、各地に考古学講座が相次いで生まれた。日本の文化レベルの変化、国土開発による遺跡発掘や地域文化の充実化に関連している。

史学科が属した法文学部は文部省の格付けが高い文学部に改組され、後に人文学類となり、考古学は歴史文化学コースに属するという変遷があった。

筆者が在職中の 2004 年、考古学研究室は 30 周年を迎えた。以下の文章は 2004 年に金沢大学考古学紀要 27 号に掲載した「金沢大学文学部考古学講座・30 周年」の文章（修正なしの原文のまま）である。当時はまだ文学部史学科の考古学講座であった。文学

部、史学科、考古学という名称が好きである。改革前の古き良き時代とも言える。

講座および学生所属組織の沿革

金沢大学法文学部は1949（昭和24）年5月、四高を前身として法学科と文学科の2学科体制で出発した。発足時の文学科には12学科目が置かれ、そこには史学第一（国史）、史学第二（東洋史）、史学第三（西洋史）および地理学が含まれていたが、考古学はなかった。その15年後の1964年、文学科の哲・史・文3学科への分離が文部省に認められ、史学科のなかに国史学（1998年に日本史学と改称）、東洋史学、西洋史学、地理学の4学科目が置かれた。1968年度以降、史学科に考古学学科目（後に考古学講座）を新設する概算要求を国史学の井上教授が中心となって推進し、東洋史学の佐口教授が引き継いだ。その努力が1974年に認められ、同年5月、史学科内に考古学講座が開設されることになった。講座の設置にともない、学生の所属組織としての考古学専攻（後に考古学履修コース）も設けられ、10月には進学生が研究室に集まり、1977年3月に初めての卒業生3名を送り出している。

その後、1980年4月に法文学部から文学部が分離・独立したのにもない史学科5講座（当時の地理学は地理学・地誌学）は文学部所属となり、今日に至る。創設以来、考古学講座は教授1名、助教授1名のいわゆる小講座として運営されてきたが、1996年の教養部の廃止にともなう文学部改組により、国際文化交流史講座と合併し、考古学大講座となった。なお、この間、1989年に金沢城内キャンパスから角間キャンパスへの移転という大事業が行われ、それまでの城内キャンパス遺跡調査に加えて、角間キャンパス内遺跡の踏査や発掘調査等を考古学講座が担当した。

大学院修士課程については、1958年の法学専攻科・文学専攻科の設置、1964年の文学専攻科からの史学専攻科の分離・独立、そして、1972年の文学研究科（史学専攻を含め5専攻）の設置という流れがあった。ただし、考古学講座開設以前のことであり、考古学研究分野は存在しなかった。考古学研究分野が創設されたのは法文学部に考古学専攻が設けられた翌年、1975年4月のことである。

1993年には文学研究科を基盤の一つとして社会環

境科学研究科（博士課程）が新設された。金沢大学の人文系大学院博士課程の誕生である。この大学院は、基盤となる学部・研究科（修士課程）から独立した研究科であったが、現在、文学研究科からは入学ではなく進学となっている。博士課程設置当初は佐々木1名の担当であったが、現在は考古学教授2名が兼任しており、実際には4名全員で考古学を専攻する学生の指導に当たっている。これまでに2名の博士（文学）取得者を出しているが、今年中にさらに数名が論文を提出する予定であり、博士課程充実が進行している。

ここで、1996年に考古学講座と合併した国際文化交流史講座について付言しておく。この講座は1991年の概算要求が認められ、翌1992年に新設された、文学部でもっとも新しい講座であった。1993年10月には教授が赴任し、国際文化交流史履修コースおよび国際文化交流史研究分野（文学研究科史学専攻）も開設された。しかし、1996年4月の文学部改組の際に大講座化の流れの中で考古学講座との合併が決定され、その名称は消滅することとなった。ただし、考古美術史を中心とする教育・研究の伝統は現在の考古学講座の中に受け継がれている。

2004年4月、金沢大学は「国立大学法人金沢大学」として新たなスタートを切った。組織・運営に関わる諸方面で大きな改編が行われ、しばらくは手探りの状態が続きそうである。たとえ体制が変わっても、今後とも教育・研究のレベルを向上させ、より多くの優秀な人材を世に送り出していかなければならないことは言うまでもない。

専任教員の変遷

講座開設の2ヵ月後、1974年7月に初代教授として着任し、1978年4月に東京大学文学部へ転出するまでの間、考古学講座の基礎固めに尽力したのが上野佳也教授であった。専攻は日本先史考古学及び心理考古学で、現在は大正大学名誉教授である。主著に『日本先史時代の精神文化』（学生社：1985年）がある。1977年3月には佐々木達夫（現教授）が専任講師として着任し、教員2名体制となった。上野転出の2年後、1980年4月には貞末亮司教授が着任し、1992年3月に城西国際大学人文学部へ転出するまでの12年間在職した。現在は金沢大学名誉教授である。日本における数少ない中・南米考古学者の一人とし

て知られており、その分野に関する多くの論文を発表している。倉林真砂斗助手は1987年7月に着任し、角間キャンパス移転にともなう遺跡発掘調査も担当した。1992年3月に貞末とともに城西国際大学人文学部へ転出した。専攻は東アジア考古学、中でも日本の弥生・古墳時代と中国新石器時代の墓制研究である。訳書に『新・考古学ワークブック』（文化書房新社:1994年）がある。

1992年4月にベルリン自由大学からウテ・フランケ＝ホクト Ute Franke-Vogt が考古学講座助教授として赴任し、翌年3月までインダス文明の講義を英語で行った。1993年10月に中村慎一（現助教授）が専任講師として、1997年4月には波頭桂助手が着任している。波頭はイスラーム陶器を中心とする美術考古学を専攻テーマとしており、「初期ラスタール彩陶器の文様」（『形の文化誌』4:1996年）などの論文を発表しているが、2000年3月に退任した。2001年4月には高浜秀教授が東京国立博物館より考古学講座に転任してきた。

一方、国際文化交流史講座は、1993年10月に田辺勝美教授が着任すると同時に、国際文化交流史履修コースおよび研究分野が置かれた。翌年10月には藤井純夫助教授も着任し、教育・研究体制が整った。しかし、1996年4月の文学部改組にともない考古学講座との合併が決定され、両名は考古学大講座の所属となった。うち、田辺はシルクロード文化史・古銭学・仏教図像解釈学が研究テーマであり、『ガンダーラから正倉院へ』（同朋社:1990年）など数多くの著作がある。5年間考古学講座の教授を務めた後、2001年4月から中央大学総合政策学部教授となった。在任中にはウズベキスタンでの発掘調査を実施した。1995年度にはイタリアのナポリ大学よりアンナ・マリア・クァリオッティ Anna Maria Quagliotti が国際文化交流史講座助教授として赴任し、南アジア・中央アジア仏教美術史の授業を英語で担当した。

教育・研究

2004年現在の専任教員スタッフは計4名である。佐々木は窯業技術史・海上貿易史・東西文化交流史を研究課題としており、『元明時代窯業史研究』（吉川弘文館:1985年）ほかの著作がある。石川県内の近世考古学の他に、アラビア湾岸諸国で発掘調査を展開している。高浜は中央アジアの初期遊牧民文

化の研究を行っており、主著として『中央ユーラシアの考古学』（同成社:1999年）がある。現在モンゴルでの発掘調査が進行中である。藤井は西アジア先史考古学、特に農耕・牧畜の起源問題を専攻している。著書に『ムギとヒツジの考古学』（同成社:2001年）がある。現在ヨルダンでの遺跡調査を進めている。中村は東アジア先史考古学および比較考古学が専門で、『稲の考古学』（同成社:2002年）を著している。中国新石器文化についての日中共同調査を継続的に行っている。

現在の文学部考古学履修コースの授業科目は「考古学概論」「地域考古学概説」「考古学特殊講義」「考古学演習」「考古学実習」からなる。それらに加え、博物館学（学芸員資格取得）関係の授業として、「博物館概論」「博物館資料論」「博物館情報論・経営論」「博物館実習」を考古学講座で開講している。文学研究科（修士課程）では、「比較考古学」と「地域考古学」の名称を冠する特論・演習と「考古学実習」が開講科目である。これらの授業科目の開講に当たってはこれまでに数多くの非常勤講師の助力を得てきた。近年では、考古学特殊講義（大学院文学研究科の考古学特論と共通）で2名、博物館資料論で1名を毎年招いている。さらに大学院社会環境科学研究科（博士課程）においても、佐々木、高浜が考古学の授業を担当している。主に1年生を対象とする教養的科目でも4名が交代で考古学を講じている。

歴任教員の多くが外国考古学を専門とすることから、本講座では日本考古学に偏ることなく、外国考古学に関する教育・研究にも力を注いできた。学生の研究テーマについて見ても、やはり外国考古学を専攻する者の比率が他大学に比べてかなり高く、本講座の特色の一つとなっている。ただし、このことは日本考古学の教育・研究を軽視してきたことを意味するものではない。現在、地方自治体の関連機関を中心に数多くの卒業生が埋蔵文化財の行政や調査の第一線で活躍している。

学生は以前、2年生の10月に研究室に進学したが、現在は2年生の4月に進学し、3年後に卒業論文を提出して文学士の学位を取得している。史学科定員は50名であるが、考古学は10～15名ほどの学生が各学年に在籍し盛況を呈している。修士課程や博士課程の学生の勉学意欲も高い。以前は教員となる学

生が目立ったが、最近では考古学分野、公務員、一般企業に就職する学生が多い。

教室外の活動としては、国内外における発掘調査や遺跡・博物館の見学実習などを実施してきた。本講座が主体となって発掘調査を行った遺跡も少なくない。それらの報告書として、佐々木達夫編『畑ノ原窯跡』（波佐見町教育委員会：1988年）、貞末堯司編『角間』（金沢大学遺跡調査委員会：1989年）などがある。他に『金沢大学（法）文学部史学科論集』『日本海文化』『金沢大学日本海域研究所報告』『金大考古』などの学内雑誌に報告を掲載してきた。また、1992（平成4）年以来、毎年春に金沢大学考古学大会を開催し、教員・卒業生・在学生及び一般市民との研究交流と親睦を図っている。

研究室の刊行物としては『金沢大学考古学紀要』と『金大考古』とがある。前者は教員・卒業生の研究成果発表の場として活用することを意図したもので、およそ年1回のペースで発行している。1978年に創刊され、1991年までに19号が刊行された『金大考古』を遷前誌とし、1993年から前記名称に改めたものである。2004年の第27号が最新号である。一方、研究室の状況を記録し卒業生に伝える目的で、1977年以来、研究室報『百万石』を発行していたが、1994年の第16号をもって『金大考古』と改称し、大学院生と卒業生の研究成果や研究室運営状況を掲載して、年3回のペースで発行を続けている。これまでに通号44号が刊行されているが、昨年12月の43号からはWeb版に衣替えし、それ以前の号も含めて考古学研究室のホームページ上で公開している。

考古学研究室には佐々木が支部長を、高浜、藤井、中村が幹事を務める古代学協会北陸支部が置かれている。考古学研究室や金沢大学埋蔵文化財調査センターと共に古代学に関する幅広い内容で講演会・研究会を随時開催しており、年間40名ほどの研究者が学生・一般市民を対象に発表し、学問公開の一翼を担っている。学会活動も盛んで、最近も日本中国考古学会、日本西アジア考古学会、オリエント学会などの総会・大会等を金沢大学で開催し、学生教育の一助としている。この他にも九谷焼考古学研究会、東洋陶磁学会、草原考古学研究会、ヘレニズム～イスラーム考古学研究会などの研究会が随時開催され

ている。

金沢大学は変革の時代の波に揉まれているが、考古学の教育と研究に教員・学生は専心している。学生が専門的職業人として考古学関連分野で活躍する条件をさらに整え、研究室開設30周年を機会に新たな歩みを進めていきたい。これまでにさまざまな場で研究室を支えてくださった地域社会の皆様や卒業生に感謝し、埋蔵文化財や生涯教育・文化財行政の面で地域貢献を果たしていきたい。（以上は金沢大学考古学紀要27 2004, 1-3 ページに掲載した「金沢大学文学部考古学講座・30周年」の文章である。）

筆者は2011年に定年退職した。思い出すままに金沢大学と考古学研究室に関連して若干追記したい。

考古学研究室の思い出

金沢大学を訪れたのは学生時代のことである。石川門横の石垣を登って上まで行くと、そこは金沢大学で学生や観光客がいた。大学院生時代に金沢、小松、加賀、山中、珠洲などに行き、石川県内の窯跡発掘に従事した。温泉旅館に泊まることが多く、金沢大学に勤務してからも窯跡発掘を断続的に行ったのは松山窯跡や九谷窯跡である。

筆者は1976年に金沢大学赴任予定であったが、当時イラクのテルサラサート遺跡発掘に参加しており、バグダッドの博物館で遺物整理もしていた。考古学講座の予算を確保のため、少なくとも年度内赴任が望まれていた。1977年3月に金沢に引っ越し、当時金沢大学キャンパスであった金沢城址で、第一期卒業生となる4年生と3年生の考古学実習を担当し、城内本丸跡の測量をした。その月末に4年生は考古学専攻の初めての卒業生となった。

翌年度から、学内工事に伴う発掘調査と金沢城址の学術発掘調査を学生と一緒に同時に実施した。泥が付いた長靴を履いて考古学研究室に入るの、廊下を掃除する方から、泥を洗い落としてから建物に入るよう注意された。

当初は研究室にまだ図書が少なく、上野教授の個人本が主であった。私の書架に本はまったく無かった。上野教授転出後は、空の書架をぼんやりと眺めながら座っていたこともある。その後、予算を確保し、大量の本を購入したが、その登録整理や設置場所で苦勞することになった。角間の中央図書館の地

下倉庫に考古学研究室本を保管する書棚を確保した。図書館長の好意で実現できたが、事務職員は大量の石のように重い報告書や本の入った段ボールや日本語英語以外の文字が書かれた本を嫌っていた。

考古学専攻の教員が私1人となったとき、担当した講義や実習は多く、大学院と学部で11科目となった。考古学のみでなく、博物館学関連の科目も考古学学生のために文学部教授会にお願いして開講したためである。おそらく国立大学では最多の科目数担当であったと思う。

史学科会議で本と物を教育研究の資料とする意義を説明し、博物館設置を提案した。考古学が史学科の部屋を取るとする人もいて賛成が得られず、まず(消防法違反の)廊下に棚を設置し、発掘品を並べることから始めた。次いで研究室内にも棚を造った。当時、大学の城外移転が検討されており、城内に残る案と金沢の東と西の山側裾を候補とする案があった。文系は金沢城址に残りたいと教授会決定したが、文部省や地元経済界・建設会社などは現在金沢大学本部も立地する角間地域への移転を望んでいた。法文学部教授会も徹夜で会議を開催し、くたびれた末に角間移転を了承した。

移転先に学部建物や図書館を設計する段階で、文部省に大学博物館設置を申請した。教員・事務員などの人員予算は付かなかったが、建物の建設は認められた。専任教職員がいないため、管理運営を考え、入り口を図書館と同じにする隣接場所の建物とした。名称は研究博物館が望ましいと思ったが、金沢大学資料館となった。その後は大学総合研究博物館への昇格を学内委員会で説いたが、学内関係者の理解は得られなかった。なお、博物館を運営するため、私は学芸員資格の国家試験(申請書のみ)を受験したが、不合格となった。その理由は不明である。次年度、同じ書類を提出すると、国家試験合格となった。

金沢城址には文化財が保存されており、石川門、三十間長屋、鶴丸倉庫は重要文化財であった。その管理運営も考古学が担当し、文部省や他省庁の役人、集中講義の先生が来ると、筆者はしばしば石川門や三十軒長屋の内部を案内して説明した。考古学実習の時間にも学生と訪れるなど、教育的環境は優れていた。

筆者の30歳代の金沢大学における研究は日本海交易や中世城館、近世陶磁器、中国考古学などが中心であった。金曜夜に夜行寝台日本海に乗り、青森県の浪岡城址(浪岡町、現青森市)、根城址(八戸市)の国指定遺跡整備委員会に出席したり、日本海沿岸の中近世遺跡出土陶磁器の調査などに出かけたりした。当時は縄文や弥生時代の発掘で表土層から出土した陶磁器を泥のついたまま保管していた教育委員会があった。大部分の発掘品はすでに発掘時点で捨てられていたようである。

月曜朝に夜行寝台で金沢に戻り、大学に向かった。学生時代から続けていた有田や波佐見の窯跡発掘にもよく行った。津軽半島の蓬田城址や波佐見の畑ノ原窯跡発掘など、金沢大学考古学研究室の学生とも一緒に行った。外国人に解放されたばかりの中国にも三上次男教授にお供してよく行った。

日本海交易に関しては嫌な思い出もある。大学院生の頃から日本海交易研究を始めており、金沢赴任後は本格的に没頭した。私が文学部史学科日本海文化研究室刊行の『日本海文化』に書いた1981年の論文から結論部分のみがそっくり東博の雑誌に掲載された。私の名前はどこにもない。中世考古学の研究者からは、そっくりだねと訝しげに指摘された。郷土資料館に勤められ、金沢大学の考古学特殊講義をお願いしていた方から金沢城内キャンパスに呼び出され、「こんなことになりました」と頭を下げられてその掲載雑誌を渡され、そのまま去って行かれた。論文の盗用・剽窃は研究者も学生もしてはいけない。学生の頃、関野雄先生は講義で、ヨーロッパで論文を書くさいには、研究者の所属する自国ばかりでなくヨーロッパ全域の50年間の類似論文はすべて見るべきであると言われたことがある。

角間に新たに建てた法文系建物の4階南側に考古学研究室を配置し、地下に考古学資料室を文学部資料保管室の名称で確保した。当時の文部省の建築基準は今よりも建築基準面積が狭かった。しかも法学部や経済学部は学生用研究室を作らなかったが、文学部は学生用共同研究室の面積を教員研究室面積から割いて設置したので、教員研究室は大変狭くなった。法文系の後に建てた理学部や教育学部の建物は文部省の建築面積基準が変化しており、教員室も共同研究室も文学部の数倍の広さがあった。理系は改

組をし、名称が変わったので旧建物に加えて新建物が加わり、面積は倍以上になった。

城内キャンパスから角間への移転は第1期移転と呼ばれ、移転先の発掘調査などを考古学研究室が担当した。工学部などが移転した第2期移転の角間敷地調査では、埋蔵文化財調査センターを学内措置で金沢大学共同利用施設として設置し、宝町の医学部建て替えや駐車場設置、鶴間キャンパスの発掘なども含めて、金沢大学敷地の建設工事の際に調査を実施した。当時の学長と私は同じエレベーターに乗っても、互いに後ろ向きに立つ険悪な雰囲気であった。内部事情を知る事務方から暖かく注意されたことを今も覚えている。医学部出身の学長は、発掘調査員枠を医学部から採るように私に命じた。私は多忙な医学部と病院から人を割くのではなく、大学全体の措置で人員確保することを主張した。当時の医学部長は後に学長となり、その交渉時にいかに私を恐ろしく思っていたかと語ったことがある。私は当時の医学部長が静かに堂々と正論を語ることに尊敬の念を持っていたので、恐ろしかったと言われて少し驚き反省した。同席していた事務長はただただ怯えていて気の毒だった。

いくつかの大学内組織の設立に関係した。文学部改組、文化交流史講座設置（後に考古学大講座設置）、資料館設置、埋蔵文化財調査センター設置、大学院博士課程設置などは文部省や学内交渉があり、研究時間が割かれて、研究時間が取れないこともあった。教養部改組に伴う教員の文学部受入れなども生身の人の生き方に関わり、悩ましい仕事であった。

台湾大学やシャルジャ大学など、個人的に交流していた海外の大学と金沢大学が大学間国際交流協定を結んだのは楽しいことだった。学生留学のために有益な協定である。シドニー大学との協定は、金沢大学の格が低いとシドニーの学部長に言われて失敗したのは悲しかった。ロンドン大学では京都大学ではないのね、と金沢大学と分かると無視された。金沢大学は現在、世界ランキング1001-1200、日本で19である。設立以来、下り坂を歩む大学と評価されているのは非常に残念である。気概を持って教育力と研究力を上げる努力が求められており、教職員のみでなく学生の努力、卒業生一人ひとりの活躍も重要である。与えられた環境で過ごすのではなく、自

分たちの力で良い環境を作る努力が大事である。

事務作業は教員の仕事の一部として担当したが、事務教員よりも研究教員となることが望みであった。研究をするために大学に勤めたのであり、教育研究に没頭することが好きだった。それはほとんど果たせなかったような気がする。子供のころから人前で自己主張することが嫌で、生きている人と関わりを持つことが苦手であった。過去の人たちの痕跡と触れ合って、なぜという疑問を解明することに打ち込むことが好きだった。研究は好きだったが、教育が苦手だったことは学生も知っていた通りである。

筆者の学生時代は、講義に対する先生方の姿勢は消極的だった。文化勲章を受章された江上先生は例外的であったが、1年を通じた講義で3回のみが開講だった。通年で10回になると、今年は講義が多すぎたと言っていた。今なら、3回に1回の開講である。それを当時の学生は当たり前と思っていた。今の教員は筆者を含めた昔の教員よりも教育熱心であり、今はそれが当たり前である。

私が退職した2011年以降の考古学研究室の変化は非常に大きい。その発展の様子を中村教授や足立教授が述べる日も来るだろう。過去・現在・未来、そのいずれかが今という時代であり、そのつながりが歴史である。

歴史を教育研究する小さな組織の考古学研究室であっても、まだ長いとは言えないのだが、やはり歴史がある。その歴史を作り支えた学生とともに、そこに籍を置いたことは幸せなことである。